三重大学教育実践総合センター紀要　2005,　第25号，29－36頁

英語学習の指導における「かな表記」による英語ポピュラー・ソングの導入

－特に英語の音とリズムの習得における活用と効果について－

早瀬　光秋*・金冶　隆司**

本研究は、異言語である英語の音を日本語の「かな」を用いていかに表記するか、そしてそれを使って英語の力が十分でない学習者に英語の歌を学習させる方法を論じたものである。「かな表記」に関しては、先行研究から知見を得つつ教室使用に十分耐えうるものを授業実践を通しながら独自に作成した。その過程における「かな表記」での課題や限界、そして作成された表記体系の特徴を論ずる。又、実際の授業における練習曲の選定方法、歌を使う教育的効果、そして学生の反応なども考察する。

キーワード：英語学習、かな表記、英語の歌

1．研究の背景

英語をいかに学生に効果的に指導するかという問題については、古くからの問題であり今日的問題でもある。これまでさまざまな指導法が試みられてきたが、日本人にとっては、これからも大きな課題であり続けることは明らかであるように思われる。

筆者の一人が勤務する高等学校で、次年度に導入される予定の「総合学習の時間の効果的な利用を目的とした、実験的な試み」のアイデアを求められたとき、「英語の歌を利用して英語を指導してはどうか」という案を提出した。その案が英語科で採用されることとなった。歌に多様な効力があることを私たちは経験上知っている。Griffee (1992) が "No one knows exactly why songs are powerful, but everyone knows from a personal point of view that they are." (p. 4) と述べている通りである。また、中島 (2000) は「歌は、授業を生き生きとさせる magic wand (魔法の杖)」(p. 1) と言う。

このような「英語の歌だけを教材にするという授業形態のクラス」を設けようと考えるきっかけとなったのは、あまり学力のない、また、英語が得意でもないし好きでもない生徒たちが、英語の歌を口ずさんでいる場面との遭遇である。英語としてではなく「好きな歌」として、「英語の歌」を英語の習得に利用してはどうかと考えた次第である。

「下手の横好き」ということわざもあるが、「すきこそものの上手」という言葉もある。好きだからこそ、嫌いな英語も、好きな「ポップ・ソング」となれば上手に歌えるのであろう。

しかも、英語に対して苦手意識や嫌悪感を持つ学生たちであるから、毎回、「英語の歌」を上手に歌えるようになることを活動の中心とし歌詞の表現とその意味の説明や文の構造的（文法的）説明は付随的なものとする。（この点に関しては、対象となる学習者のモティヴェイションと英語の学習能力に応じて加減する必要がある。）

2．練習曲の選考

「英語が得意でもないし好きでもない生徒たちが、英語の歌を口ずさむ」という現実は、最近の映画の主題歌のヒットや、テレビコマーシャルの影響もあるようである。と言うのは、彼女たちが口ずさむのは決まってそのような歌だからである。したがって、学生たちが興味を持てるような曲を選べば、英語教育に役立てることができるのではという考えから、「英語で歌おう」というクラス（週1回2単位）が設けられることになった。

英語の学力の低い学習者、また小学生のようにまったく英語の知識のない学習者が、歌詞の意味もわからずに、上手な発音で歌詞カードも見ずに歌えるようになるということを考えれば、最初は単なるパロッティングであるかもしれない。しかし、そこから lexical phrases として日常的に有用な表現を身に着けるきっかけとなる可能性があるし、英語に新たな興味を抱くきっかけとなることを期待でき、それがさらなる動機付けとなるのである。

なぜいまさら「英語の歌」を、と言う疑問を持たれるかも知れない。「英語の歌を利用した英語の授業もすでにある」と。それに対して私たちは次のように考える。まず一番目に、これまでの「英語の歌」は、普段「英語Ⅰ」や「リーディング」等の名称のもとにおこなわれている授業の中で、息抜き的に、また、進度の都合で利用

＊三重大学教育学部
＊＊堺女子高等学校（非常勤講師）

されることが多いように思われる。 次に、教科書等の「英語の歌」は、教える側からの選曲であり、学生にとってあまり興味のある歌でないかもしれない。

このような意味で、授業を始めるにあたって、曲の選択が問題になった。まず学生の興味を持っている、もしくは、興味を持ってもらえるような曲を選ばなければない。また、学生の能力に応じた、内容的にも、高校生にあまり有害ではない歌詞の曲を選ぶことも考慮しなければならない。1年目は曲を選ぶのに、最初は、学生たちが口ずさんでいる曲や一般的に良く知られている曲で、しかもギター伴奏できる曲を選んだ。これは、指導する側のカラオケソフトの知識が乏しく、ソフトが充実していなかったことと、ギターを弾きながら歌うことに学生たちが興味を示してくれるのではないかと考えたからである。また、4月に授業が開始されてから、授業中に学生にアンケートを取り、それを参考に選曲をし、年間のおおよその曲数を確保した。

初年度は、前もって学生の要望を聞くなり、アンケートをとるという処置ができず、最初の数回の授業は、できるだけスローテンポの、また、歌詞もできるだけ容易なものを選んだ。また、伴奏（インストロメンタル）の部分は、英語そのものを聞き取る場合に邪魔にならない、あまり騒がしいものでない曲の方が英語の指導という観点からは望ましい。したがって、ロックよりはカントリーやフォークソングの方が望ましいといえる。したがって、1年目は、学生の望むと望まざるとにかかわらず選曲にそのような傾向が見られる。その後、学生の望む曲を選択するように配慮したが、その中には学生に不評な曲もあり、2年目の選曲は、1年目の学生たちのフィードバックから、学習する曲の順番を入れかえたり、また、曲そのものを入れかえた。特に不評であった曲をリストからはずすこともあるが、やはり、指導的観点から効果的に指導するという教育的配慮も必要である。したがって、学生に譲れない選択曲もあり、その点を考慮しながら2年目の選曲をおこなった。ポップやロックのジャンルの曲の違いは、主にその受講者の要望の違いによる。つまり、ビートルズの曲が追加されたり、また、The Doobie Brothers の Long Train Running などが追加されているが、それらの曲は学生にとってはかなり苦労する曲であった。また1年目と2年目にクラスに参加した軽音楽部の部員の意向（自分たちがコンテストや学園祭で演奏したい曲）が反映されている。1年目にこのクラスに参加した軽音楽部の部員の一つのグループが翌年、大阪府で開かれた高校生のコンテストで優秀な成績を収めたが、少しはそれに貢献できたのではないかと考える。

なお、2年間で学習した歌のリストを補遺の1と2で示した。

3．かな表記

(1) かな表記の導入

次に問題となったのは、総合の時間を利用した高校2年生を対象とした選択クラスにもかかわらず、英語の文どころかローマ字さえも満足に読めない生徒がクラスにいたことであった。これは、予想外であったが、かえって「かな文字表記」による英語の歌を実験的に取り入れるきっかけとなった。余談ではあるが、このことによって小学4年生のローマ字の学習以前にも英語の歌を導入できる可能性をもたらしたのではないかと考える。

しかし、この英語音をかな文字で表記するという作業は以外にも多くの問題を露呈した。確かに、音韻体系の異なる言語をその言語以外の表記法を用いてその音を完璧に記述することは最初から不可能であることは明白であった。

しかし、どうしても「英語で歌おう」クラスを選択した学生に英語の楽しさの片鱗だけでも味わってもらいたくて、あえて、この暴挙に挑戦することになった。

この「英語の歌詞のかな表記」は、最初に予定になかったため、選択クラスが開始された当初は、試行錯誤しながら次週に予定されている歌詞の「かな文字表記化」をおこなうこととなった。この自転車操業的作業は夏休み直前まで続いた。夏休みに入って2学期以降に教材として予定されていた曲の歌詞の「かな表記化」の作業にも余裕ができたが、最初に歌詞の「かな表記化」システムを構築していたわけではなかったので、英語音の「かな表記」に問題点や矛盾が表面化した。結局、この「英語音をかなで表記する」ことがこのプロジェクトの最大の問題となった。そのため、島岡（1994）の提唱する「中間言語」などを参照しながら、英語の歌詞の下に、出来るだけ正確な「かな表記」を試みた。

その試作した歌詞をためしに学生に読ませたところ、実際の「英語音」とは程遠い発音が聞かれた。「かな表記」の作成にたずさわる者には英語の知識があり、「英語」と「かな文字表記」の両方をみて発音する。それに対して、英語の十分な知識を持たない学生は「かな文字表記」のみを見て発音する。したがって、英語的な発音にはならない。「かな文字表記」も試行錯誤しながらも改良に改良を加え、次第に改善されているとはいえ、それだけでは十分に英語の音を表記は出来ないのである。

結論的にいえば、「オリジナルの曲」と「かな文字表記された歌詞」のどちらが欠けても十分ではない。「オリジナルの曲」を学生に聞かせ、彼らの耳にはどう聞こえるかを認識させ、その上で「かな文字表記された歌詞」をその理解の一助として利用するのが望ましい。

(2) かな文字表記の問題点

この「英語の歌のかな表記による英語の練習法」を試

みた最初の時点から、最大の難問は、日本語にない英語特有の音を、日本語の表記法を用いてどのように表記・表現するかであった。

母語と異なる言語を習得しようとするとき、「日本語と英語とは音声構造が質的に異なるので、EFL 学習者に対しては促進よりはむしろ干渉の働きが強く働くことが容易に想像される。」(島岡　1944, p.13) そのような状況で、母語の表記法を利用する場合、さらにその干渉度が増大することは想像に難くない。

たとえば、「r 音」と「l 音」の対立、「th 音」の表記、「w 音」、「母音」など、どうしても仮名表記では限界がある。また、「サ行」「タ行」「ハ行」に見られる不規則性や、「ヤ行」「ワ行」「キャ行」等に見られる音の欠落 (3. (5)の音声表記対照表を参照) を、どのように表記するか。さらに、日本語の音韻体系には存在しない子音結合 (Consonant Cluster) をどのように表記するか、英語音の「かな文字表記」における大きな問題である。

繰り返し述べていることではあるが、「たとえ、どのような表記法を用いても、音体系の異なる言語を、完全に表記することはできない。」したがって、たとえば、ear は「イァ」、year は「キァ」または、「ゐァ」と表記し、その表記の意味するところを事前に、具体的な発音方法などを説明しておく必要がある。

英語の歌の歌詞をかな表記する場合、島岡 (1994) の試みでは学習者のかな表記による英語音の近似値的発音 (「近似カナ表記」) で英語のコミュニケイションをはからせる (p. 2) ことを意図している。

しかしながら、筆者たちの場合は、よりネィティヴの発音に近いコミュニケイションを容易にするような発音の習得を目指して「英語の歌」を英語学習の中心に据えることが「英語で歌おう」というクラスの目標である。したがって、あくまでも、ある程度英語と英語音声学的な知識を持ち、また、学習者の発する音を聞いてそれを判断する耳を持った指導者のもとで学習することを前提としている。したがって、島岡 (1994) とは異なる視点から仮名表記のシステムの構築を試みていることになる。よって、ここで用いられる英語音の仮名表記は、島岡 (1994) より不十分な部分もあるが、島岡 (1994) におけるように try の r 音を「渡り音」として「チュアイ」と表記する (p. 12) ことにためらいを覚え、独自の表記法を使用するにいたった。確かに、母音に後続する「r 音」を「小さな 'ァ'」で表記するのはかなり理にかなった表記表であろう (たとえば bird を「ブァード」と表記する) が、子音に後続する「r 音」を「小さな 'ァ'」で表記するのはカナ表記という点では多少問題を含むように思われる。

「かな表記を用いる」ということは、どうしても母国語の干渉を避けられない。したがって、「たとえいかなる表記法を用いても音韻体系の非常に異なる言語を完璧に記述することには限界があることは明白である」という観点からスタートし、その不足している部分をいかにして補うか。それが、たとえば、try を島岡 (1994) のように「チュアイ」、または、筆者たちが用いる表記法で「トゥらィ」と表記しても決して try の音を正確に記述しているわけではない。そこには IPA による記述と同じように実際の音と記述の仕方の間にある種のルールを決めなければならない。

それでも、なお、仮名表記を用いるメリットはあるのかと問われれば「ある」という結論に達する。それは、島岡 (1994) にもあるように「日本語話者」のすでに持っている知識を利用し「はるかに早く英語らしい発音を身につけられる」(p. 2) ようにするためである。

(3) 今回用いる「かな文字表記」の特徴

どのような表記法を用いても完璧に英語音をかな文字で表記することは不可能であり、説明なくしては正確な発音とは程遠いことは想像に難くない。しかしながら、たとえそうではあっても、説明が無くても、そのままで読んでもある程度英語音に近いものでなくてはならない。

まず、英語音を表記するために、外来語に用いられる「カタカナ」を基本とすることにした。母音に関しては、日本語では 5 つしかないのに対して、英語にはおおまかに分類して 8 つある。これをどう表記するかを考える必要がある。筆者たちの場合、[æ]、は IPA の原則と同様に同様「ア」と小さな「ェ」を組み合わせて「アェ」、二文字に対して下線が付されているのは一文字として発音することを表す。これによって二重母音の「アェ」と区別する。後部母音の [ʌ] は「オァ」または、「ウァ」と表記しようとした (その区別は、音韻論的にそのもとの音が o であったか u であったかのかによる) が、あいまい母音のシュワの [ə] と区別する必要性のために、[ʌ] は「オァ」、[ə] は「ウァ」と表記することとした。[ɑ] は「アア」と表記し、[ɔ] の「アァ」と区別する。母音に関しては以上のように表記することにした。

次に、子音に関しては、たとえば、th-音 (ð や θ) は、類似音が日本語の音韻体系に存在しない。このような音は、学習者が習得する際には、経験的に考えると、その習得が容易になるのではないか。r-音、l-音、また、w-音などは母国語の近似的な音で代用する傾向にある。このため、かえって、正確な英語の音を習得するのが困難であるように思われる。具体的には、その一例として s-音はカタカナで表記し、th-音 (ð や θ) は、ひらがなの「ざ行」および「さ行」で表すことにした (3. (5)の音声表記対照表を参照)。島岡 (1994) では / s / も / θ / も半角・全角で区別されてはいるが、同じカタカナの「ス」を、その有声音には「ズ」を用いる (p. 10)

が、やはり学習者にその違いを意識させる意味で異なる文字を用いるのがよりよい選択ではないかと考えられる。

あくまで「かな表記」は英語の初期学習者、または何らかの原因によって英語の学力を十分に習得できなかった学習者に対する補助的教材の役割しか果たせない。このことを十分に認識して用いるべきである。その不足している情報を補うのは学習者を指導する教師と、オリジナルの歌手の歌う歌の発音・リズム・メロディーである。再度強調しなければならないのは、英語のように、まったく音韻体系の異なる言語の音を仮名表記だけで正確に記述することは不可能であることは明白である。したがって、指導する側にも、また、指導される側にも英語音の仮名表記についてのルールに関する知識が必要である。

(4) かな表記の具体例：

You Are My Sunshine の一部

You　make　me　happy,
ユゥ　メィク　ミィ　①ハェピィ

when　skies　are　gray;
ウェン　スカィズ　ザァ　グれィ

I　dreamed　I　held　you
アィ　ドりームド　ダィ　ヘルジュー

in　my　arms.
イン　マィ　アームズ

You　told　me　once,　dear,
ユゥ　トゥル(ド)　ミィ　ゥワンス、　ディァ

you　really　loved　me,
ユゥ　りィァリィ　②ロァヴド　ミィ

And　no　one　else　could
アン(ド)　ノゥ　ゥワン　ネルス　クッド

come　between
コァム　ビトゥウィーン

But　now　you've　left　me
バッ(ト)　ナゥ　ユゥヴ　レフト　ミィ

and　love　another,
アン(ド)　ロァヴ　アナざァ

上記の例に関して、学生に配布する実際のプリント教材では、英文は 12〜14 ポイントでボールドなどの目立つ文字、それに対し、下部のかな文字は 6〜8 ポイントの小さめの文字を使用しあまり目立たぬ配慮をしてある。

その理由は、かな表記はあくまで補助的なものであり、アルファベットそのもの自体による語句の認識にいたる過渡的なものに過ぎないと考えるからである。また、それこそが中間言語としての役割だからである。

以下に、学習者に対する「カナ表記」の特徴の具体的指導例を示す。

1. 下線部は、リエゾン（前の子音とその後に続く母音がつながる）や、日本語にない母音（たとえば「あ」と「え」の中間音）など、できるだけ英語の音に近くなるように表記を試みているので、必ずしも個々の単語の文字どおりの発音ではない。

   具体的には、①単語 “apple” や “fan” に含まれる下線部の前部母音［æ］（「ア］）はそれぞれ「アェプル」「ファェン」のように表記されている。また、② “come” や “fun” に含まれる下線部の後部母音［ʌ］（「ア］）はそれぞれ「コァム」「フォァン」のように表記されている。
2. ひらがなの「さ」行および「ざ」行は、th 音で、舌を上の歯に軽く当てる。
3. ひらがなの「ら」行は、r 音で、舌を後ろに引き、舌先を口蓋に付けないことだけに注意をする。「う」の口の形で発音するとよい。

   かたかなの「ラ」行は、l 音なので、舌の先を上の歯ぐきにつけたまま、「い」の口の形で発音する。
4. （　）は、脱落するか、閉音節（後に母音が続かない）で、ほとんど息の音だけであることを示す。

(5) 音声表記対照表

英語音のかな表記に用いられている表記法のシステムの理解の一助として、以下に対照表を示す。英語の歌詞に併記されているかな表記は下記の表記システムに基づいて表記されている。

ただし、下記のかな表記とそれに対応する実際の英語音を、学習者に十分に理解させておく必要がある。

	k 行	s 行	t 行	n 行	h 行	f 行	m 行
æ 段	カェ	サェ	タェ	ナェ	ハェ	ファェ	マェ
ʌ 段	コァ	ソァ	トァ	ノァ	ホァ	フォァ	モァ
ə 段	クァ	スァ	トゥァ	ヌァ	ふァ	ファ	ムァ
i 段	キ	スィ	ティ	ニ	ヒ	フィ	ミ
u 段	ク	ス	トゥ	ヌ	ふ	フ	ム
e 段	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	フェ	メ
ɔ 段	コ	ソ	ト	ノ	ホ	フォ	モ
ɑ 段	カァ	サァ	タァ	ナァ	ハァ	ファァ	マァ

	j 行	r 行	l 行	w 行	kj 行	ʃ 行	tʃ 行
æ 段	ヤェ	らェ	ラェ	ゥワェ	キャェ	シャェ	チャェ
ʌ 段	ヨァ	ろァ	ロァ	ゥウァ	キョァ	ショァ	チョァ
ə 段	ユァ	るァ	ルァ	ゥウァ	キュァ	シュァ	チュァ
i 段	キ	り	リ	ゥウィ	キュィ	シィ	チ
u 段	ユ	る	ル	ゥウ	キュ	シュ	チュ
e 段	キェ	れ	レ	ゥウェ	キュェ	シェ	チェ
ɔ 段	ユォ	ろ	ロ	ゥヲ	キョォ	ショ	チョ
ɑ 段	キア	らア	ラア	ゥワア	キャァ	シャア	チア

	g 行	z 行	d 行	dʒ 行	b 行	v 行	p 行
æ 段	ガェ	ザェ	ダェ	ジャェ	バェ	ヴァェ	パェ
ʌ 段	ゴァ	ゾァ	ドァ	ジョァ	ボァ	ヴォァ	ポァ
ə 段	グァ	ズァ	ドゥァ	ジュァ	ぶァ	ヴァ	プァ
i 段	ギ	ズィ	ディ	ヂィ	ビ	ヴィ	ピ
u 段	グ	ズ	ドゥ	ジュ	ブ	ヴ	プ
e 段	ゲ	ゼ	デ	ジェ	ベ	ヴェ	ペ
ɔ 段	ゴ	ゾ	ド	ジョ	ボ	ヴォ	ポ
ɑ 段	ガァ	ザァ	ダァ	ジャァ	バァ	ヴァァ	パァ

	nj 行	hj 行	kw 行	ð 行	θ 行
æ 段	ニャェ	ヒャェ	クワェ	ざェ	さェ
ʌ段	ニョァ	ヒョァ	クウァ	ぞァ	そァ
ə段	ニュァ	ヒュァ	クウァ	ずァ	すァ
i 段	ニュィ	ヒュィ	クウィ	ずィ	すィ
u 段	ニュ	キュ	クゥ	ず	す
e 段	ニュェ	キュェ	クェ	ぜ	せ
ɔ段	ニョォ	キョォ	クヲ	ぞ	そ
ɑ段	ニャァ	キャァ	クワァ	ざァ	さァ

[表記具体例]

cat：カェ（ト）、chat：チャェ（ト）

(6) 日本語の 50 音図における不規則性

次の表中の下線部の音は同じ行の他の子音とは異なっているか、また、本来的に欠落していることを示す。紙面の都合で不規則性および欠落のみられる部分のみを示してある。

ざ行	わ行	ら行	ら行	や行	は行	た行	さ行
za	wa	la	ra	ya	ha	ta	sa
ji	i	li	ri	i	hi	chi	shi
zu	u	lu	ru	yu	fu	tsu	su
ze	e	le	re	e	he	te	se
zo	o	lo	ro	yo	ho	to	so

ヴぁ行	ふぁ行	にゃ行	ちゃ行	じゃ行	しゃ行	きゃ行	だ行
va	fa	nya	cha	zya	sha	kya	da
vi	fi	ni	chi	zi	shi	ki	zi
vu	fu	nyu	chu	zyu	shu	kyu	zu
ve	fe	ne	che	zye	she	ke	de
vo	fo	nyo	cho	zyo	sho	kyo	do

ただし、日本語を母国語とする者にとっても、英語文化の流入（外来語）や英語教育の普及の影響により、現在では下線が引かれている音であっても奇異な感じを与えず自然に聞き、また、発することが出来る音もある。

たとえば、日本人が苦手とする［si］と［shi］の区別を明確にするために、上記の表の「サ行」を「スァ、スィ、スゥ、スェ、スォ」と表記し、「シャ行」を「シャ、シィ、シゥ、シェ、シォ」と表記することも可能である。

4．歌を使う教育的意義・効果

まず、英語の歌を中心に英語の授業を進める最大のポイントは、その曲のリズムやメロディの助けを借りて、英語の持つリズムや発音を習得することである。言い換えれば、日本語特有の拍のリズムを矯正し、同時に、子音結合（Consonant Cluster）の発音の矯正を図ることを目的としている。

第二に、昨今の学生は、面白くなければ授業に参加してくれない。（これは、学習者の学習に対する情熱・熱意によって変わるが）英語の歌を用いるというのは、一つは学習者の興味を持続させるためである。したがって、英語学習に使用される曲は、学習者が興味を持っている曲であることが肝心である。（実際の授業に用いられる曲は、ほとんど学習者の要望・アンケートによって決定されている。）

しかし、歌詞の内容や実際に歌う場合の難しさなども考慮されるべきで、学習者に妥当なものでなければならない。したがって、教育的見地から、学習者の望まない曲を指導することもある。

英語の歌を利用した英語の指導に関して文章による説明だけで筆者たちの意図を十分に伝えることは難しいが、次に具体例を一例挙げる。

ビートルズの「オブラディオブラダ」の歌の出だしに「Desmond has a barrow in the market place」という歌詞があるが、仮に、初期段階の英語学習者に、これを伴奏なしで読むか歌わせるとすると、日本語の拍のリズムを当てはめ、「デ・ズ/モ・ン/ド・ハ/ズ・　ア/...」と一文字 8 分音符をあて、二文字を 4 分音符一拍分で発音する傾向がみられる。したがって、何の注意も与えずに歌わせてみると、メロディーに遅れ、字余り状態になってしまうのが普通である。

実際には、最初に原曲を聞かせて、この歌のメロディの中心のリズムをなす 8 部音符の「タ・タ・タ・タ・タ...」のリズムであること、閉音節との関係で「Des・mond / ha・sa / bar・row / in・the / mar・ket / place / ...」（♪・♪/♪・♪/♪・♪/♪・♪/♪・♪/4 分音符/で「デズ・モン（ド）/ハ・ズァ/ バア・ロウ/ イン・ざ/マー・ケッ（ト）/プレイス/」となることを確認させ、最初はゆっくりと、次第に原曲のスピードやテンポに近づけるように練習を重ねる。上記の表記は、/タ・タ/、/タン/ を意味し、およそ次のようになる。

デズ・モン（ド）/ハ・ズァ/ バア・ロウ/
タ・タ　/　タ・タ　/　タ・タ　/

イン・ざ/マー・ケッ（ト）/プレイス/
タ・タ / タ・タン / タン

楽譜を入手できるものに関しては、譜面を利用して音の長短とそれに対応する単語を視覚的に理解させやすい。

もう一つこの英語の歌を用いる利点は、毎時間かなりの量のオリジナルな英語の歌を聴くことによって、「英語の聴解能力が改善される可能性が大である」ということである。

この小論では「右脳・左脳」を議論する余地はないが、さらに、音楽を利用するという点から「右脳を活用し言語のリズムや発音を効果的に学習できる」可能性も秘めていると考えられる。

5．実際の指導のあり方

まず最初に原曲を聞かせて曲のイメージを捉えさせ、次に、原曲の英語の歌詞をメロディー無しで読んできかせる。そのとき、仮名表記の歌詞を利用して、学習者の理解を助ける。

その際、曲のメロディーやリズムとの関連で発音に関する注意すべき点を説明し、メロディー無しで読ませ、ある程度ウォーミングアップさせる。

また、そのときに歌詞の意味も説明する。

次に、原曲を聞きながら、それに合わせて歌ってみて、どうしてもうまく歌えない、もしくは、どうしてもうまく発音できない箇所をチェックさせる。その箇所をアカペラで一緒に歌いながらメロディーやリズムに合わせて発音できるように指導する。ただし、学生によっては音域の合わない者も出てくるが、原曲は音の高低を変化させられないのでそのまま我慢して練習させる。

ある程度習得した段階で、カラオケソフトに変えて練習させる。恥ずかしがって一人で歌う学生は少ないので、最初は、全員で歌わせ、その後人数を徐々に減らし、最後には一人ひとりに歌わせる。その歌うたびごとに問題点を学習者に伝え、その箇所だけをアカペラで繰り返し練習させる。

最後に目標曲をカラオケも無しで歌わせ、最終チェックを行い、オリジナルの曲を流して、それにあわせて歌わせ、自分たちがそのアーティストと同じような発音で同じスピードで歌えることを認識させるそして実際にそれができると学習者に強い自信を与えることになる。

6．学生の声

選択授業出席者は毎時間(ただし、週2単位の授業は2時間連続しておこなわれるので実質的には2コマで一回の授業)、授業の終わりに「選択授業出席カード兼自己評価表を記入することになっている。1. 準備・予習、2. 意欲、3. 理解度、4. 到達度、5. 満足度の5つの項目があり、各項目に自己評価（A　よい、B　ふつう、C　もうすこし）を記入することになっている。2003年度の自己評価の集計を延べ人数で以下に示す。

1. 準備・予習
　A：234/300　B：56/300　C：10/300
2. 意欲
　A：235/300　B：52/300　C：13/300
3. 理解度
　A：233/300　B：49/300　C：18/300
4. 到達度
　A：227/300　B：59/300　C：14/300
5. 満足度
　A：237/300　B：49/300　C：14/300

すべての学生の自己評価を無条件に信用するわけにはいかないが、項目間におおむね相関関係があると考えてよいであろう。しかも、自己評価は授業で練習する歌が「自分の好きな歌」かどうかに大きく依存していると考えられる。

また、授業の終わった後に学生たちが大きな声で練習した曲を歌いながら廊下を歩いていく姿が、このクラスに対する学生たちの評価を表しているように思われるのである。

7. おわりに

今回の試みは、「カナ表記によって英語を習得させよう」という点では、島岡（1994）の試みとは、表記の方法が異なるだけで、その目標とするところは同じである。つまり、英語学習者の初期学習を少しでも容易に、また、効率的にすることである。ただ、そこに、さらに、「英語の歌」を利用し、母国語話者の発音、そして、最も重要な要素である「メロディーとリズム」を取り入れた点である。

英語の授業の面から振り返ると、一学期分全部の内容を歌だけで構成するのは他にあまり類を見ないのではと考える。その意味でも、選曲や「かな表記」活用などの指導法に工夫を凝らせば、まさに「英語の歌の授業」が可能であるばかりでなく十分な成果を収めうることを証明する機会となったことをうれしく思う。

社会が変化し、それに伴って学校の存在意義も変化し、学生の学習に対する意欲も千差万別である。今回のこの試みが、このような変化に対応し、英語嫌いや英語苦手とする学生の興味をそそり、その興味を持続し、さらに学生みずからが英語を学習しようとするきっかけとなることを期待したい。

参考文献

1) 後藤明生『文部省指導要領にそった歌う英語教室』1987年、大修館。
2) 島岡丘『中間言語の音声学　―英語の「近似かな表記システム」の確立と活用―』　1994年、小学館プロダクション。
3) 土屋唯之『ポップス英語の歌は生きている!』1996年、南雲堂フェニックス。
4) 中嶋洋一『"英語の歌"で英語好きにするハヤ技30』2000年、明治図書。
5) Griffee, Dale T. *Songs in Action.* Prentice Hall, 1992.
6) Suk Mei Lo, Regingo & Chi Fai Li, Henry. Songs enhance learner involvement, *English Teaching Forum*, 1998, 36/3, pp. 8－11.

補遺 1.

2002年度2年選択授業「英語で歌おう」
練習曲一覧

月/日	曲　名（歌手名）	備　考
4/16	You Are My Sunshine (Bing Crosby)	
4/23	Top Of The World (Carpenters)	
4/30	Take Me Home, Country Roads (John Denver)	「耳をすませば」挿入歌
5/7	Donna Donna（Joan Baez）	
5/14	House Of The Rising Sun (Animals)	
5/28	Oh, Happy Day (ゴスペル・コーラス)	
	We Shall Overcome (ゴスペル・コーラス)	
6/4	Sailing（Rod Stewart）	
6/11	Super Star（Carpenters）	
6/25	We Are The World (USA for Africa)	
9/10	I Will Follow Him	「天使にラヴソングを」挿入歌
9/17	I Can't Stop Loving You (Ray Charles)	カップラーメンCM
	Can't Help Falling In Love (Elvis Presley)	
10/8	Love	ボスコーヒーCM
10/29	Grandfather's Clock (平井　堅)	
11/5	O-bla-di O-bla-da (The Beatles)	
11/12	Silent Night	クリスマス・ソング
	Jingle Bells	クリスマス・ソング
	We Wish You a Merry Christmas	クリスマス・ソング
11/19	Rudolph The Red-Nosed Reindeer	クリスマス・ソング
	Joy To The World	クリスマス・ソング
11/26	Hey Jude（The Beatles）	
12/3	Here Comes Santa Claus	クリスマス・ソング
	Santa Claus Is Coming To Town	クリスマス・ソング
1/14	The Loco-Motion (Kylie Minogue)	
1/21	Puff, The Magic Dragon (Peter, Paul, & Mary)	
1/28	Killing Me Softly (Roberta Flack)	ネスカフェCM
2/18	（最終授業日）（復習）	

補遺 2.

2003年度2年選択授業「英語で歌おう」
練習曲一覧

月/日	曲　名（歌手名）	備　考
4/15	You Are My Sunshine (Bing Crosby)	
4/22	Take Me Home, Country Roads (John Denver)	「耳をすませば」挿入歌（日本語）
5/6	Sailing（Rod Stewart）	
5/13	Puff, The Magic Dragon (Peter, Paul, & Mary)	
5/27	Grandfather's Clock (平井　堅)	
6/3	Top Of The World (Carpenters)	
6/10	We Are The World (USA for Africa)	
6/17	Hey Jude（The Beatles）	
6/24	L-O-V-E（浜崎あゆみ）	ボスコーヒーCM
9/9	My Heart Will Go On (Celine Dion)	映画 'Titanic'

月/日	曲　　名（歌手名）	備　　考
9/16	O-bla-di O-bla-da (The Beatles)	
9/30	Long Train Running (Doobie Brothers)	
10/7	Where Do Broken Hearts Go (Whitney Houston)	
10/28	…Baby One More Time (Britney Spears)	
11/11	I've Never Been To Me (Charlene / 小柳ユキ)	パナソニック CM Song
11/18	To Love You More (Celine Dion)	
11/25	クリスマス　ソング集	
1/13	Open Arms (Journey)	
1/20	I Want It That Way (Backstreet Boys)	
1/27	Up Where We Belong (Joe Cocker)	映画「愛と青春の旅立ち」 主題歌
2/3	Theme From Mahogany (Diana Rossh) Killing Me Softly (Roberta Flack)	ネスカフェCM ネスカフェCM
2/17	If We Hold On Together (Diana Ross)	アニメ Little Foot
2/24	Review （一人ずつ好きな曲を独唱）	（授業最終日）

左表の網掛けの部分は2003年度の新規導入曲である。これらの曲は、学生のリクエストによるものと、CMソングとしてテレビで頻繁に流れるため、学生にとってもなじみやすくメロディーも知っている可能性が高いと考えて導入した曲である。したがって、授業に用いられるこれらの曲は毎年変更を余儀なくされる。

初年度の2002年度と2年目の2003年度の選択曲を比較した場合、2003年度では、Britney Spears、Backstreet Boysなど曲が新しく採用された曲であるが、このような新しい曲は学生からのリクエストによるものであり、筆者たちの年代のものにはなじみが薄い歌手かもしれない。

また、Celine Dion、Whitney Houstonなどは映画の主題歌の影響によって学生からリクエストされたものである。

また、少し古い年代のグループであるBeatles、Doobie Brothers、Queen、Journeyなどは、受講生のなかの軽音楽部の部員からリクエストされた曲である。

以上のように、わずか10名〜20名足らずの受講生であっても、その興味の対象となる曲や歌手は千差万別である。

したがって、当然、対象となる学生の年齢や興味の対象によって選択する曲が大きくかわる。大事なことは、教える側が教えやすい曲を選ぶのではなく、教えられる側が興味を示す曲を選択しなければならないことである。それが、このような授業形態を選んだ最初の理由の一つ「英語嫌いを直す」だからである。